云ひさして
ふと口つぐむ
萩の雨

山口佐東一郎

詩

集

夏黄眠大人に捧ぐ

家藏版150部の内

特製五部(1−5)白革表紙
上製百四十五部(6−150)局紙表紙
NO. 97.

家藏版150部の内

特製五部(1—5)白革表紙
上製百四十五部(6—150)局紙表紙
NO. 97

序

堀口大學
鈴木龍一

裝序

東一郎君

君の二十歳は僕の信念に裏書する。

所謂詩壇が詩を忘れてから幾年になるか？詩壇に非詩が平氣で通用するやうになつてから幾年になるか！十年にもなるであらう。いや、それ以上になるかも知れぬのである。兎に角久しいことである。その間詩壇は贋金の批評で非詩を商ふ商場であつた。

經濟學の原則にグレシヤムの法則と云ふの

がある。「悪貨は良貨を驅逐す」と云ふのがそれである。然しそれにしても非詩が行はれる詩壇からは詩が姿を隱すことはグレシヤムも多分知らなかつたであらう。兎に角十年ほどの間詩壇から詩が隱れてゐたのは事實である。

不幸なのは實にその間に詩のあこがれに目覺めた若い人たちであつた。彼等の多くは非詩に走つて非詩を耕した。かうして一ジエネラシヨンの詩才の眞珠が泥にまみれた。惜いことだ、然し仕方もないことだ。

非詩が詩壇にはびこつて、詩が詩壇から姿をかくしたこの期間に同じく巣立したのだが、然もよく非詩の非詩たる由因を知つて隱れた眞(まこと)の詩の踪跡を探ねて、一圖自(みづか)らの秀れた稟性のみちびくをたよりに、詩を詩壇から遠くその隱住の地に見出した數羽の若い琴尾鳥があつた。

東一郎君

君は最初に僕の前に現はれた若い琴尾鳥の

一羽であつた。數年前の事である。君が二八の日の事である。僕はその頃ブラジルに居た。鈴木龍一が僕に君のことを語つた。君は君の詩を送つて僕に示した。僕はすなほな温良な君の人となりを愛した。僕は君のうちに明日の詩人を見た。君は昨年第一詩集「ぶろむなあど」一卷をわれ等に與へて多くの約束に署名した。君は今また矢繼早にこの第二詩集「祭日」をわれ等の爲に梓に上して先の「ぶろむなあど」の約束の一部を果さうとする。若者は急ぐ。

前途が長いからだ、

東一郎君

君の二十歳は僕の信念に裏書する。

一九二四年六月ぶかれすとにて

堀口大學

祭　日

雨の朝

廣いホテルの赤煉瓦に
五月の雨は降りかかる。

三階の窓際で、空を見上げては
ボオイが自分の上衣に
ブラシをかける。

二階のカアテンはまだ下りたまま。
たぶん、あの部屋には
夢にまで戀をみる貴婦人が
しどけなく眠るか、
或ひは酒に肥つたお金持ちが
ぐつすりと眠つておいでだ。

階下の食堂の窓下には
雨にびつしより濡れた犬が
食堂から洩れる燒肉の匂ひに

空腹を一層空腹にしてうづくまり、
馳け落ちのお二人は
雨に氣をくさらし乍らも
熱いコーヒーを喫してゐる。

廣いホテルの赤煉瓦に
雨は靜かに、降りかかる。

ひぐれ

しつとりと青空までが濡れて
庭園のリラの薫りが雲にまで匂ひ
雨後の微風が青葉の間を輪舞する。

濡れた芝の上を馳けまはる子供と
仔犬の叫びとが快く反響して
ひぐれの薄明に夕餉の仕度をする
料理部屋の母親に微笑を起させる。

時計はやがて七時を告げ
靜かに天地の灯(あかり)が眼をさます。

鳥

夕ぐれの静けさに
庭の樹に居た雀が
一羽とび去ると
殘つた一羽も
續いて飛び去つてゆく様に
私の生活は
一羽づつ、一羽づつ
私から飛び去つてゆく。

雀の去つた樹は
いくら夕陽に輝いても
いくら微風に搖いでも
他の樹よりは
一層さびしさうに
私には見える。

汽車

氣輕な肥つた
酒舗のお爺さんが
パイプを薫らして
歩き出す。

お腹の中では
呑み過した濁酒と
上等の古葡萄酒とが

平和にきつちり淀んでゐる。

プウフ　プウフ。
大きく静かに呼吸して
退屈を知りすぎたお爺さんが
太い腹をゆすつて散歩に出かける。

三面記事

情死、自殺、他殺、轢死
訴訟、姦通、強盗、家出
おおそは夜光蟲の如く
貴婦人の頸飾りの眞珠の如く
或は商人の指輪のダイヤ
叢に蛙をうかがふ蛇の瞳か
強く弱く紙上に輝やく。

おお三面記事は新聞の心臓。
活字が生きて讀者にとびつく
一日の話題の源泉。
三面記事は紙上の十字路。
讀者の眼は縱横左右に走り廻れば
交通整理の必要がある。

夕涼み

椽臺にねころんで
夜天を見下ろすと
銀河が仄かに流れてゐる。

目高の樣につひつひと
流星が銀河から泳ぎ出て
雲の藻草に身をば消す。

軒端にかけた風鈴は
木蔭に滴る噴水。
涼しい音で風を濡らす。

木の葉がくれに
乘りてのない三日月のボオトが
澄んだ湖水で待つてゐる。

彼方の雲間には稻妻が
螢よりも忙しい呼息、

犬によく似た息づかひ。

新聞配達は夕刊を
蝶々の様に花瓣の様に
家々へ撒いてゆく。

涼む姿は夕闇に吸はれて
白い團扇が生き物の様に
ひらひらと庭で躍る。

さあもう食事だ、みんな這入らう。
椽臺に開きつぱなしの本の頁は
風にめくらせて夜露が讀まう。

會話

寂しき面輪と靜かなる魂(こころ)を持ちて
雨に吸はるる辻馬車の響を愛(め)で
黄昏の薄明(トワイライト)を好める君にしあれば、
わが魂(こころ)もその靜けさの反響(こだま)をば受け
香の煙のもつれて一條となる如く
二人は語る、一人となりて。

雨

お前の馬車と
街路の上に
銀をなすりつける
繪具刷毛。

嵐

樹木が羽ばたきをして
飛び上がりさうだ

硝子戸に、瓦屋根に
雨が光を破裂させる

傘に引きずられてゆく
傾いた往來の人たち

遠くの海は風を侮る
白い舌をひらひらさせて

雨雲の退屈なひるねに
星は私を夢にみる

酒場

醉へば醉ふほど
コップが唇に吸ひつく。
ジャッヅ、バンドはどこで鳴る？
露臺の上でか？頭の中でか？
紅い灯、青い灯、みんな螢、
上へ飛んだり、横にとまつたり。
炎をもやして、汗みどろ
笑つて、唄つて、踊り廻る。

だれが醉つてるんだ？
だれが素面（しらふ）なんだ？
コップが光る、トランプが光る
はてはナイフがギラリと光る。
おお、マリヤ、サンタ、マリヤ
殺してやりたい、人を、俺を。

秋の夜

岩間に涌く清水の様に
虫の音が夜の地上に溢れる。

それは透明な、閑寂な
秋冷を覺ゆる可憐な小夜曲(セレナアデ)。

靜かにそれを聽き乍ら
闇に浮べる遠い思ひ出。

三日月も雲間から仄かに
薄目を開けて聽き入る。

靜物

朝の樹蔭に
薔薇を抱いた彼女は
何と優美な花甕だ。

洩れる陽と
青葉の影とは
尙も靜かに彼女を彩る。

傍にうづくまる仔犬は
置き忘れた襟卷きであり
凋れた花瓣である。

すべては青空の
半圓形の額緣に入つた
鮮やかなパステル畫。

寄する

マリイ、ロオランサン
お狐さん、
女服をまとつた
お狐さん。

青い月夜に
化粧して
戀の寢乃を

合すかな。

小曲

このうららかな
晴天に

私は戀を
しようとしてゐるのか

今や戀を
してゐるのか

それとも戀は
過ぎて了つたのか

おお貴女の瞳(め)の中には
あまり風景が多すぎる

催眠歌

部屋の時計と、心臟が
寂しい行進曲を繰返し
月の光りの指す徑を
私の仙女は去つて行く。

窓から後姿を眺めれば
キユーピットの弓、お月様
意氣に反つてはおいでだが

行衛の知れぬ矢の行衛。

さあさあ靜かに眠りませう
ロマンチツクにくるまつて
月の光りを胸に消し
風邪も引かずに眠りませう。

シャボン玉

紅い薔薇が
枯れたなら
シャボン玉をば
吹きませう。

私の呼息で
ふくらんで
やがて破れる

シャボン玉、

虹の五色が
何であろ
消えりやはかない
夢の夢。

雪の梯子

吾等しづかに
雲の梯子を昇らう。

ふみしめて、ふみしめて
遠い青空を憧憬れて。

雲の梯子は柔い
貴女の羽根布團の樣に。

空しい梯子に飽きた時
潔よく、ふみはづさう。

下では湯沸(サモワル)が煮立ち
珈琲茶碗が待つてゐる。

願望

もの靜かなこの夕ぐれに
吾等何をか望まう

おお吾等花園の中なる
凋れた薔薇の刺を愛さう

花びらに散りかかる涙
そなたの殉情を喜ばう

薫はしい宵闇に浮ぶ
遠い思ひ出を眺めやう

輕く搖らいで扇が作る
戀の匂を吾等味はほう

愛人よ、靜かに倚りそつて
夜の天使の來るのを待たう

この夕

この夕
この秋の夕。

私は心臓(こころ)に
落葉の音を聴く。

輕やかに
然も重苦しく

落葉は私の心臓(こころ)に降る。

そして、
夏の日の追憶(おもひで)が
黄金色の地平線へ
私から離れるのを感じる。

この夕
この秋の夕。

物静かな薄明の中で
私は私の墓碑銘を彫らう。

朝

煙草の輪から
私は太陽の
薔薇を眺める

ぶらんこ

ひよいと
青空に搖れ上がつて
貴女は太陽の接吻を
受け止める

ひらりと
キユーピットの矢よりも早く
貴女は空から舞ひ下りて

木蔭の私に接吻を渡す

夜

今夜のお月様は
ピエロオの泣き顔、
まるで私の鏡だ。

雪

いたづらな御空の天使が
今は遠く離れた戀人の
冷えた情熱(おもひ)の灰を散らす

おお何とそれは私の心に重く
私の手の上に輕い

墓碑銘

煙草の煙のドーナツを作り
細い竹のステッキにひかれ乍ら
マンハッタンの料理店(レストラン)に入つて
單眼鏡(モノクル)へ情慾の灯を點けたなら
如何に彼女の尊敬を集めたでせうに

エロデ王よ

釣魚

河の話を聞かうと
細い電話線を
水中に投げ入れる

河は返事の代りに
銀の名刺を
線の端に結びつけた

消閑

牧羊神(パン)だつて
笛を鳴らしてばかりは
居りませぬ

尼僧だつて
お祈りしてばかりは
居りませぬ

軍人だつて
戰爭してばかりは
居りませぬ

天使たちはその爲に
戀と晝寢を
藏つてをきます

三月

三月――花の三月、私の三月
可愛ゆらしい春のお嬢さんが
シンデレラの塗馬車に乘つて
靜かに近づいて來るのだ。

馬車の輪だちの跡には
澄んだ小川が流れ出し
投げる花束が地に落ちて

みんな一時に花を開らく。

彼女の聲は蝶となり
高く低く唄の調べをそのままに
時には愛人の髪を飾る。

そして柔らかな日光は
窓硝子からのぞきこんで
私たちに祝福の接吻をする。

柳

房々と垂れた綠の髪を
お前は風に櫛けづらせて
誇りかに流れる水に鏡する

美しい裸體の乙女よ
太陽が靜かにお前を愛撫し
お前の髪に接吻をする

戀情に燃える血汐が
蔦色の肌の下を流れて脈打ち
今にもお前は踊りさうだ

つつましく見えても
もともとお前は河の乙女だ
踊るがいい、唄ふがいい

お前が夜の薄絹をまとふ時

水の面に月が降りて
お前の髪を竪琴と奏でやう

ヴエニスの夜

運河をはさむ家々には
今宵も紅い灯がともり、
流れる水は大理石の階段と
果てることのない戀を語る

水の面に降る薔薇の花びらは
夜風が船頭のゴンドラ、
窓から洩れる小夜樂を乘せて

橋をくぐつて海に出る

大空には月こそないが
晝よりも青く澄み渡り、
星たちはカスタネツトと
調子を合はせて搖れてゐる

私の心

友よ、
私の心は
井戸の釣瓶だ。
喜びに充ちた
微笑みを
あふれさす時も
もう一つの心は
空つぽのまま

深い底に沈んでゆく。

けれど、
私は氣にしない。
今の私の心から
喜びが消える頃には
深い底から
鮮しい微笑みを汲んで
もう一つの心が

手繰り上がるのを
私は知つてをるから。

寄する

田舍者の巴里っ子
巴里っ子の田舍者
君は巴里の自然を唄ふ
君は戀の風景を唄ふ

淋しい雨が降つたとて
嘆くことは知らない
夕方、陽が沈んだとて

悲しいとは思ふまい

君にとつて雨だれの音は
葬送曲(アッドマアチ)よりは少し陽氣だ
陽が暮れた時こそは
星に杯を捧げる饗宴(うたげ)の時だ

ポオル、フォールの墓石は
圓舞(ロンド)を踊る一群れ、

教會堂の鐘の音は
燕が譜をば空に描く

心をふたぐ嘆息も
セエヌ河に投げすてて
君は戀の風景を散歩する
詩のスケッチを振り乍ら

夜帽

蜘蛛が軒先で
夜帽を編んでゐる
お月様が被るのだ
Eh! Bon soir La Lune!!

夜の庭園

雲に隱れて
風に乘つて
ああ　この庭園に
夜が集まる

噴水は
音もなく凋れ
小鳥等は

眠りに消えた

夜の重みに
靜まる
池のほとりで
すすり泣く二人のもの

お前たちは
百合の花心の墓場から

そつと忍び出た
ロメオとジュリエット

お前たちの
心臓を透して
ああ　蒼ざめた
月が昇る

哀傷

夜空には
星が一杯に
咲いてゐたのに

街路には
散歩の人たちが
輕い足どりで流れてゐたのに

そして
人混みの中に交つて
私も歩いてゐたのに

きまぐれな
憂愁(メランコリイ)が私の心に
マントの様に被(かぶ)さつてゐた

私のまはりでは

戀が渦を卷いてゐた
私を眞中に取り殘して

噴水

噴水よ、
烈しい日光の下で
お前は絹糸の雨を降らせて
干枯らびた私の心を
しみじみ濕ほしてくれる

噴水よ、
お前にはどうして

夕ぐれの唄しか唄へぬのだ
靜かな單調なお前の唄は
やがて戀人のすすり泣きに似る

噴水よ、
お前が月の光に踊るとき
私は水の面にくだけ散る
お前と私の憂愁を
悲しみもなく眺めやう

郵便局

お前の唇は
戀の郵便局
私の額や頰に
憶ひ出のスタンプを押す

苺

苺畑に風吹けば
眞紅に熟れた
心臓が
葉蔭で
戀の眼をさます

星空

星空の美しさよ
ランプは邪魔だ
消して了はう

闇よりはややに明るい
仄かな光りが
貴女の身體を私に告げる

食卓の上のコクテエル・グラスに
凋れた風が觸れて
もう一杯召し上れとすすめる

思ひあまつた貴女の言葉は
星空に小鳥となつて舞ひ上る
私の接吻がそのあとから

戀の花園へ

私等の花園へ
あゝ星空の美しさよ

秋の夕暮

神殿のやうに冷やかな
雜木林の奥ふかく
枯葉焚く煙りが
夕靄と何時か混つて了ふ

まだ林の向ふの野末では
紅玉のやうな太陽が
小鳥等の歸る行手を

母親らしく眺めてゐるのだが
夜は靜かに薫り初め
東の空の月には灯りがついた
けれど、まだ私は
このまま散歩を續けたかつた

風は私より一足先きに
落葉の絨毯の上を馳せ過ぎ
小鳥等の聲も消えて了つて

夕暮の沈默(しじま)は物悲しく重苦しい
この古い銅版畫の風景は
夜の天鵞絨の中に包まれて了ふ
私はこれらに眼で接吻をして
靜かに心でADIEUと告げやう

TABLE DES MATIÉRES

序

雨の朝……1
ひぐれ……4
鳥……6
汽車……8
三面記事……10
夕涼み……12
會話……16

雨……17
嵐……18
酒場……20
秋の夜……22
静物……24
寄する……26
小曲……28
催眠歌……30
シャボン玉……32

雲の梯子……34
願望……36
この夕……38
朝……41
夜……42
ぶらんこ……44
雪……45
墓碑銘……46
釣魚……47

消閑……48
三月……50
柳……52
ヴェニスの夜……55
私の心……57
寄する……60
夜帽……63
夜の庭園……64
哀傷……67

噴水……70
郵便局……72
苺……73
星空……74
秋の夕暮……77

畢

大正十四年三月十日　印刷
大正十四年三月十五日　發行　價貳圓

詩集　祭日　初版

著作兼發行者　岩佐東一郎　東京市外大森山王二三〇〇
印刷所　カタロク社　東京本郷森川町一番地

發售處　東京牛込早稲田鶴巻町　泰文社

詩集

ごあなむろぷ

岩佐東一郎

MCMXXIII

■日夏耿之介氏序
■百部限定出版

吾等新らしき美を求める
吾等墓場の上で踊らう
ギイ・シャルル・クロ

■四六版局紙印刷
■價貳圓税拾八錢

申込所　東京市番十本郷區ノ西片四町目　春潮都社